言語学の基本概念

菅田茂昭

目　次

1. 言語学の成立
2. 言語とは何か
3. 言語(能力：習慣：活動)
4. ラングとパロール
5. 言語記号：恣意性と線的特質
6. 統合と連合
7. 言語の記述：共時態と通時態
8. 構　造
9. おわりに

1. 言語学の成立

言語学は人間の言語を対象とする経験科学であるといわれる。経験科学は事実を観察して，そこにみられる現象を説明することを目的とする。そこに規則が存在するものと仮定して，観察や実験によりその存在を確めようとする。にもかかわらず言語は「多様であり混質的である」とソシュールが述べているように，余りにも複雑な現象であるため，その科学的研究といっても容易ではない。

言語の科学的研究は一般に比較文法の研究をもって始まるとされるが，A. メイエは文字の発明には音素の認識が必要であり，文字の発明者こそすでに偉大な言語学者であったとさえ言っている。確かに人々は学問が起こる以前からことばについて疑問を抱いていた。ものの名は一体どこから来たのか，また異民族との接触はなぜ他民族は異なる言語を話すのかといった素朴な問いを起させていた。人はあるいは学問以前にもっとも難解な疑問を発するものかも知れない。すでに創世紀第2章には「はじめに言葉ありき...」とあり，さらに第11章にはバベルの塔といった具合いに古代

人がまずことばの発生や名称の起源に興味をもっていたことが伺われる。ところで，ことばの発生は人間が四足動物から直立のそれへと進化し，口が本来の機能から開放されたことにより促されたとみることができよう。さらに道具が手を補い，その延長となったごとく，ことばも直接的な叫び声の延長として，間接的にことばによる思考が可能となり，やがて文明の開花をみることになったと考えられる。未開民族の言葉あるいは幼児の言葉の研究はこれまでことばの発生に関しては有効な成果を与えてはいない。なお古代ギリシャにおけるものの名称についてのヘラクリトスの physei 説とプラトンの thesei 説は依然こんにちの象徴論，記号論に受継がれている。

しかしながらギリシャ人たちは異民族の言語をバルバロイと見做して研究せず，自らのギリシャ語から一般論を導いた嫌いがあった。中世においてはラテン語の研究が隆盛となり，今度は逆に本来対象とすべき生きたことばが研究対象とされない結果を生んだ。そこでは規範文法が迎えられ，その裏付けとして Port-Royal の文法にみられるように論理学が尊ばれた。文芸復興によって初めて旧約聖書のことばである，系統の異なるヘブライ語がヨーロッパにもたらされたのである。さらに航海の発達は土着民の言語を知らせるにいたった。こうして人々の言語の知識が時間的にも空間的にも拡大することにより，言語についての学問の誕生する機が熟していった。その最初の契機は 1786 年 Sir. W. ジョウンズがインドのカルカッタでサンスクリット語に接したこと，そしてサンスクリット語がギリシャ語，ラテン語などと同じ共通の源から発したものではないかという疑問からであった。まさに東洋と西洋との接点において一つの学問が発生することになったのである。それは F. ボップの『サンスクリット語の動詞変化』(1816) で始まる比較文法であった。言語学はその今日の方法論はソシュールを待たねばならなかったが，現代のチョムスキーにいたるまで，大きく歴史主義に依拠した近世の言語学，構造主義とともに発達した近代の言語学，そして変形文法に代表される現代の言語学と三つの時期を経ながら発

展してきたと考えることができよう。

2. 言語とは何か

ホモ・サピエンスはホモ・ロクエンスである。原始人は言語を発明したときから人類となったということができる。動物にもことばがあるといわれることがあるが，それはこれから述べるように人類のことばとは根本的に異なる。したがって「動物のことば」とは単に比喩的な表現に過ぎない。

さて，人間の言語はどのような特徴をもっているといえるだろうか。そのかたちとはたらきについて簡単に触れておきたい。

まず第一に言語は音からなり，これを手段としていることがあげられる。もちろん文明国では音声言語のほか文字言語を用い，Verba volant, scripta manent といわれるように，文字は残り，文化の伝承に貢献する。第二に言語は分節的である。動物の言語が場面に直接反応したものであるのに対して，人間の言語はこれをいくつかの単位に区切る。分節と呼ばれ，マルティネはこの分節こそ人間の言語を動物の言語と区別するものであるとしている。この分節により人間は過去のこと，あるいは未来のことをも表現することができるのである。

次に言語の機能については，ウィーンの心理学者 K. ビューラーが言語記号とそれをとりまく話し手，聞き手，伝達内容の3要素との関係に焦点を合わせて論じている。言語記号は伝達内容（話し手および聞き手の両者に外在する）の表現（または symbol）であり，話し手の状態や特質の表出（または symptom）であり，聞き手への呼びかけ（または signal）としての機能をもつとしている。R. ヤーコブソンはこれにさらに詩的，メタ言語的および対話的機能を加えている。

3. 言語（能力：習慣：活動）

これまでは「ことば」について考察するためのいとぐちを発見しようとしたのであるが，それは「ことば」というものを抽象的なレベルで捉えていたに過ぎず，具体的なレベルでわれわれが直接触れることができるのは，英語，中国語などの個別言語である。しかしともかく人間の言語一般につ

いて考慮しうるのは「ことば」という概念にことば能力とことば習慣という二つの面が含まれていることを示唆する。

ことば能力 (faculty, competance) は生得的なものとして人間に普遍的にみられるものであり，ある言語共同体(社会)においてその国語に触れて初めて発達するものと考えられ，したがって潜在的な存在である。ことば習慣は言語共同体ごとに異なるのが普通である。外人とことばが通じないとき，それは習慣が異なるからであって，相手に能力が欠けているとは普通考えない。だがこのような習慣といえども言語共同体の各成員の脳裏に潜在的に蓄えられているものである。能力としての言語をもとにこのような習慣としての言語を道具として使うことによりはじめて言語能力も言語習慣も効力をもつのである。事実話し手はある場面において事態を摑んで，これを習慣にしたがって分節し，音声化する。聞き手はその場面にあって音を捉えて，習慣にしたがって意味を想起しながら総合して，伝達内容を理解する。これをわれわれは言語活動 (ランガージュ，performance) と呼ぶことができる。言語活動は能力や習慣の顕在である。とはいえ言語活動は習慣と等しくはならない。伝達が可能であるためには社会的なコードとしてのラングが必要であるが，使用するのは個人であるため，その際に個人的な特徴(パロール)も含まれるからである。

4. ラングとパロール

ソシュールはランガージュを社会的な面としてのラングと個人的な面としてのパロールとに2分することにより言語学の対象を明確に規定しようとした。ランガージュは多様であり，混質的であって，物理的，心理的，個人的，社会的なさまざまの領域にまたがり，それらの特にどの部門に属するかを決めることはできない。彼はこのランガージュのなかから，人間に共通する能力の社会的所産であり，その能力の行使を個人に許すべく社会がとり入れた契約の総体としてのラングを抽出し，これを自立的に定義しうる対象として，ランガージュの本質的な部分とした (*Cours*, p. 25)。社会的所産としてのラングはまた集団意識としてシニフィアンとシニフィエ

との心理的連合からなる言語記号(のちに述べる)の体系としても捉えられているからソシュールはラングに社会的および心理的な定義を与えていると考えられる。これに対してパロールはランガージュの付帯的部分として登場する。パロールが遂行された際の個人的な面を指していることは彼が各個人の声が異なってもラングには影響はないとか，交響曲自体は演奏者が替わっても変わらないなどと説明していることから充分に理解される。彼はまたラングとパロールとの区別を裏付けるために，失語症において自身に向けられた発話を理解することは出来ても，自ら話すことが出来ない，すなわち受容面に関与するラングを保有するが，遂行面に関与するパロールの能力を失った場面をあげている。このようにソシュールはランガージュの中にその社会面であるラングと個人面であるパロールを分かつことにより，しかもランガージュの研究の総体の中でラングの研究に真の価値を与えることにより，同時に言語学自体の関連諸科学に対しての位置づけを行なったのである。

なお，ソシュールにあってはこのようにパロールをラングの遂行と見做し[ランガージュの概念に接近する]，したがってパロールを通してのみラングに迫ることが可能だとする面と，それをランガージュにおける個人的な特徴に限定していると考えられる面とがある。ソシュールがこれら三つの用語自体を定義しようとしたのではなく，それらの概念を規定しようとしたものであることを考慮してもこの点は曖昧である。

この点に関し，服部四郎博士は発話の社会習慣的に繰返し現われる特徴をラング，個人的特徴をパロールとする2分法を採用しておられる[「ソシュールの langue と言語過程説」言語研究 No. 32 (1957)]。同じく R. ウェルズはラングは「体系化される」のに反し，パロールは「体系化されない」と述べている。これに対し G. デヴォートはパロールを「いまだ体系化されない」ものと修正している。この伝統はすでに G. ベルトーニの「個人の言語」なる概念にさかのぼるもので，G. ネンチョーニの言葉を借りれば「言語活動における直接の動的な関係は主体と集団の言語との間に

ではなく，主体と個人の言語との間に存する」のである。一方 A. マルティネのコード，メッセージはそれぞれソシュールのラング，パロールに対応するものであるが，例えばイタリア語にはコードとして 26 の音素があるが，*canto*「私は歌う，歌」というメッセージにおいてはこのうち五つの音素が用いられているといった具合いに区別されている。

ここで N. チョムスキーの言語理論とソシュールの 2 分法ラングおよびパロールとの関係を考えてみるのも興味あるテーマである。チョムスキーも能力 (competance) 対運用 (performance) の 2 分法を用いている。彼の文法は native speaker の判断あるいは直感ともいうべき能力を前提としているが，文を生成する創造力，文法性の判断力，文法的関係の理解力といったものはメンタリスティックな存在である点がソシュールのラングの概念への対応を示唆する。だがソシュールのラングが集団意識のなかに配分される社会制度であるのに対し，チョムスキーは個人的な意味での能力に関心を向けている。彼はソシュールを批判して「ソシュールのラングは文法的な特性を備えた記号の単なる集合にすぎず，これでは taxonomic で，話し手の創造力や判断力を説明できない」といっている。この意味でチョムスキーの運用をソシュールのパロールに対応させれば，チョムスキーの能力はソシュールのランガージュおよびラングを含む概念とさえいうことができよう。

5. 言語記号：恣意性と線的特質

言語には表現(音)と内容(意味)との 2 面があり，ある言語共同体においてはある音(連続)はある一定の意味を喚起し，逆にある意味はある一定の音(連続)を喚起するといった条件反射的な習慣が確立している。ソシュールは音と意味とのこのような結合を言語記号と呼び，彼の用語によれば言語記号は「シニフィアン(能記＝聴覚映像)とシニフィエ(所記＝概念)とを結ぶ，2 面を有する心的実在体」とされる。彼はこの分断しがたい関係を 1 枚の紙片の表裏にたとえている。そして「言語学の仕事場はこの結合領域であり，結合は形態をうみ，実態をうみはしない」という。ブルームフ

ィールドも「音と意味との対応関係の研究こそ言語の研究の課題である」と彼の『言語』を結んでいる。

A. マルティネは1次分節により伝達すべき内容をモネームと呼ばれるひとつの音声形式とひとつの意味をもつ単位の連続に分節しているが，こうして得られる単位が言語記号である。モネームはそれ以上意味をもつ単位に分析されることはなく，したがって記号としての最小単位をなす。一方音声形式(シニフィアンに相当する)はさらに2次分節をうけてフォネーム(音素)と呼ばれる最小単位に分割される。モネームは開要素(その数が限定されない)をなすのに対してフォネームは閉要素である。

さて，ソシュールは言語記号の特性として恣意性と線的特質の二つをあげており，ソシュールの言語理論はこの二つの原理に支えられているといってもよい。第一の点は，すでにプラトンの『クラテュロス』のなかで物と名称との関係が論じられていらい，古代からの変らぬ課題であるが，ソシュールはシニフィアンとシニフィエとの間に必然性なしとする立場をとっているのである。第二の点は，発話は話線と呼ばれる線的な形態において顕現するというものである。マルティネはこれは言語が音声からなり，音声が時間の流れに沿って順に発せられ知覚されることに起因するものと説明する。逆に視覚的に伝達される絵はその要素は順に描かれたものであっても見る方はその全体にあるいは一部に注目する。彼はまたこの線的特質は言語の範列論 (paradigmatics) とも相関関係にあり，例えば *dog*「犬」対 *god*「神」，*mal*「悪」対 *lame*「刃」においてはフォネームの配列が関与性を発揮すると説いている。

ソシュールは言語学はこの二つの原理を否定しては成立しないと言明している。そしてこれらの原理はこんにち公理として疑うものはないが，G. ヘルダンはこれを証明した上で採用すべきだと提言している [Lingua e Stile 誌 (1969)]。彼は言語統計学に基づき，第一の原理についてはこれまでなされたように「イヌ」なる概念に対して言語によりこれを表わす形式が異なることを述べる方法を批判し，恣意性は同一言語内で説明されるべ

きだという。特定言語において各音素の起こる頻度がそれぞれ定まっていることが，音と意味との直接的関係の成立を拒むことに係り合っているとする。また第二の原理については，どんな量のテキストをn等分し，n箇すべてにわたって起こる単語，n—1箇，n—2箇の部分に起こる単語，といった順に計算しても，その割合いが常に一定であることから，言語の線的な拡がりを説明する。

この線的特質に対して音素を弁別的特徴の束と見做すR. ヤーコブソンは批判的である。しかしG. レプスキーが指摘しているように，ソシュールの線的特質はパロールのレベルにおけるものであるのに，R. ヤーコブソンはラングのレベルから批判しているのではなかろうか。

なお，ソシュールは言語学を記号学の中に位置づけているが，同じころアメリカにおいてもパースが記号体系の中に言語を置いているのは興味ある。現在この体系はシーボックにより精密化されている。

6. 統合と連合

言語現象には線状に繰り広げられる発話自体を直接観察して得られるものとそれを他の発話と比較することによりはじめて得られるものとがある。日本語である経験は「ここにビールがあります」のように分節され表現される。そして話線における各単位の選択は恣意的にではなく伝達内容によって決定されていく。言語単位はモネームであれ，フォネームであれ2種類の関係に置かれながら顕現する。一つは発話に顕在する「ここに」，「ビールが」，「あります」における各単位間の関係であり，統合的(syntagmatique)関係と呼ばれ，他はあるコンテクストに起こるがそこではたがいに相容れないような単位間にみられるもので，例えば「ビール」をその代りに「ブドー酒」，「日本酒」などを含む発話と比較して得られるいわば潜在的な関係であり，連合的(associatif)——こんにちでは範列的(paradigmatique)なる用語がむしろこれに代って用いられる——関係と呼ばれる，一方はヨコ軸上に，他方はタテ軸上に広がりをもつ関係である。言語はこうした座標軸上に繰広げられる存在である。二つの軸の交叉点において単

位の選択が行なわれる。たとえばイタリア語の *arriviamo*「我々は到着する」における *arriv-* と *-iamo* とはサンタグマティックな連帯関係にあり，同時に *arrivate*「君たちは到着する」に対して -iamo と *-ate* とはパラディグマティックな交替関係にある。交叉点において冠詞のように他の単位との交替の可能性が限られているものは閉要素，形容詞や名詞のように交替の自由なものは開要素と考えることができる。

なお，基本的な関係概念を表わすパラディグマティックおよびサンタグマティックなる用語は，学派や学者によりそれぞれ名称を異にするので注意を要する。伝統文法でいう形態論：統語論に対応するものであるが，A. マルティネは opposition: contrast, R. ヤーコブソンは similarity: contiguity，グロセマティックでは2者択一：共存関係といった用語を用いている。序でながら R. ヤーコブソンは失語症においてヨコ軸の障害は，例えば語順の乱れを生じ，前置詞や活用語尾の脱落もそこに含まれる。一方，矛盾した表現が平気で行なわれるのはタテ軸の障害であるといっている。

7. 言語の記述：共時態と通時態

多様であり，混質的である言語はさまざまな視点から，また方法により観察され，記述されうる。音声をとりあげても，音響学者や物理学者にとってはその周波数とか，生成が関与性をもつのに対して言語学者にとっては伝達の道具としての性質が関与性をもつことになる。また言語学者がある言語共同体の習慣としての言語を記述しようとしてもそこにはさまざまの世代が共存していたり，さまざまの社会的階層が存在しており，厳密に均質的 (homogeneous) な言語に達するのは困難であろう。ここではこのような問題には立入らないで，言語は時代とともに変化するものであるという前提から出発し，言語を記述する際もっとも重要な方法をなす2分法に触れることにしたい。

ソシュールはまたもや共時態および通時態という2分法を提唱する。時間的に同じ軸の上に広がりをもつ言語はその姿を体系として捉えることができるが，その体系を時間の流れにそって捉えることはできないとするの

である。ソシュールは『講義』のなかで，この関係を将棋に喩えて「将棋の勝負では与えられた場面はそれに先立つ場面から解放されている。・・・その時の場面を記述するのにまえに起こったことを思い浮かべる必要は毛頭ない」といっている。だが体系と変化とは E. コセリウが「言語は通時的に進化しながら形成されるが，共時的に働くものである」と指摘しているようにつねに相互に依存していることも見逃してはならない。こんにち方法論的にはこの2分法が不可欠であることを疑うものは少ないが，プラーグ学派はこの二つの観点を再統合しようとしていることが注目される。もちろん『講義』からは言語体系の変化を構造的に研究することが可能かどうか不明である。しかし A. マルティネが唱導しているごとく孤立的な変化自体は非体系的であっても，新しい体系を生じるにいたることは認めなければならない。

共時・通時の概念は実体的な時間とも直接関係はない。ある発話を始めて終わるまでの時間の持続は通時とは呼ばない。ある発話をある時代の言語で始めて別の時代の言語で終えるなどという心配は無用である。この意味で実体的な時間との混同を避けるためにも共時とは可換的な時間であり，通時とは非可換的時間であると表現しておくのもよかろう。

8. 構　　造

「構造」とは手短にいえば建築物がどんな材料でできているかにかかわりなく全体としていかなる構成をなしているかを問うときに得られる概念である。母音 *a, i, u* は個別的に存在するのではなく，R. ヤーコブソンの三角図が示すように相互に依存しながら存在している。またフランス語の *bas*「低い」はその音声学的実質を問わずとも *pas*「...ない」に，あるいは *haut*「高い」と係わり合いをもつ存在である。メイエは構造を "un ensemble òu tout se tient"「すべてのものがたがいに係わり合う全体」と定義している。ソシュールは構造の概念に基づいた言語学を確立したことからしばしばこんにちの構造主義の原点とされるが，すべての科学は多かれ少なかれ構造主義的視点を含んでいる。

さて構造主義言語学はソシュールのいうごとく「言語は形態にして実質にあらず」と考え (R. ヤーコブソンの音韻論は実質主義的であるが),「言語単位はその相互関係によってのみ定義されうる」とする。ここにはじめて言語学が作業仮説を他の隣接諸科学に求めながらこれまで発達してきたのに対して，その自立性を主張しえたのであった。

構造主義は前世紀の歴史主義的な原子主義へのアンチテーゼとして生まれたものであったが，20 世紀の言語学を支配した構造言語学はどの学派にあっても分節 (segmentation) および分類 (classification) に代表される方法を採用していた。そこでは言語は各単位の諸関係として統一された集合体と見做されがちであった。

これに対して現在チョムスキーはこれまでの経験主義を排して，理性主義と組みすることにより，われわれの言語使用能力を解明しようと試みている。つまり人間の精神にまで迫ろうとするのである。彼のいう言語能力とは生得的であり，話者が文を生成する創造力，文法性の判断力のことである。文法とはこうした能力を説明すべきものである。あらゆる文は外から観察される表層構造 (従来の構造主義は この表面的な現象にとらわれすぎたとされる) と，その根底にあって これを支配する 論理的関係ともいうべき深層構造をもつとする。前者は音声化されてわれわれの耳に達するものであるが，後者は意味に関係する。文法はその生成する文の意味とその音形とを結びつける規則の体系となるのである。そこには伝統的な構造主義はなく，これに動的なベクトルが加えられているとみることができる。

9. おわりに

こんにち (構造) 言語学はその隣接諸科学に対して範例的な価値さえもつほどに成長したが，言語学の自立性はその多様かつ混質的な対象自体の性格上たえず問われる運命にある。ソシュールにより自立した言語学は再び隣接諸科学との協調を求めている。これまで諸言語をその相違点を前提として記述することに重点がおかれたのに対して，その類似点にも注目しながら，人間言語の普遍的特性に迫ろうとしているからである。

参考書について

言語学への入門に際して必要と思われる文献を以下20点に限ってあげてみる。なるべく日本語で書かれたものから，また外国語で書かれたものでも邦訳のあるものはそこから選ぶことにする。

a) 言語学概論

まず言語学の概論として大学の講義をもとに読み易く解説したものに，

① 川本茂雄： 言語学概説（1954［初版］，播磨書房）

言語の本質とその研究方法を概括した，

② 高津春繁： 言語学概論［国語国文学大系］（1957［初版］，有精堂）

b) ソシュール理論

近代言語学の原点ともいえる，

③ フェルディナン・ド・ソシュール　小林英夫訳： 一般言語学講義（1972［改版］，岩波書店）

ソシュールに基づいて言語学の基本概念を論じたものとして，

④ こばやし　ひでお： 言語学通論（1972［改訂第7版］，三省堂）

ソシュールへの手引きとしては，

⑤ G. ムーナン　福井・伊藤・丸山訳： ソシュール（1970，大修館書店）

c) 言語学各論

言語の本質論，音韻論，意味論などにわたる論文集として，

⑥ 服部四郎： 言語学の方法（1960，岩波書店）

音声学に関しては，

⑦ ベルティル・マルンベリ　大橋保夫訳： 音声学［文庫クセジュ］（1970［改訂新版］，白水社）

⑧ 服部四郎： 音声学［岩波全書］（1951［初版］，岩波書店）

意味論に関しては，

⑨ S. ウルマン　池上嘉彦訳： 言語と意味（1967，大修館書店）

比較言語学に関しては，

⑩ 高津春繁： 比較言語学［岩波全書］（1950［初版］，岩波書店）

d) 欧米の主要学者

⑪ ロマーン・ヤーコブソン　川本茂雄監訳： 一般言語学（1973，みすず書房）

⑫ アンドン・マルティネ　三宅徳嘉訳： 一般言語学要理（1972，岩波書店）

⑬ L. イェルムスレウ　林栄一訳述： 言語理論序説［英語学ライブラリー］（1959，研究社）

⑭ ヴァルター・フォン・ヴァルトブルク　島岡茂訳： 言語学の問題と方法（1973，紀伊国屋書店）

⑮ エドワード・サピーア　泉井久之助訳： 言語（1957，紀伊国屋書店）

⑯ L. ブルームフィールド　三宅・日野訳： 言語（1970［新装版］，大修館書店）

⑰ J. P. B. Allen—P. Van Buren, *Chomsky: Selected Readings* (London, 1971)

⑱ ジョン・ライアンズ　長谷川欣佑訳： チョムスキー（1972，新潮社）

e) 言語学辞典

とくにお奨めしたいものとして，日本語で書かれたものでは，

⑲ 国語学会編： 国語学辞典（1955［初版］，東京堂出版）

フランス語で書かれているが，生成文法に関する用語まで取入れた最新のものとして，

⑳ J. Dubois, M. Giacomo ほか，*Dictionnaire de linguistique* (Paris, 1973)

がある。